なぜ比較語彙研究か

―― なぜ語彙研究は未開だったか、なぜ必要か ――

田　島　毓　堂

何のためになる？

もう数年前のこと、当時、名古屋大学では第２学年の後期に教養部生が学部の授業を受講できることになっていた。その教養部生が受講できる授業の一つ「語彙研究」の最初の時間に、授業の方針や概要、目的、手順などを事細かに話し、次回の予定について告げてやめようとした途端、質問があった。「先生、一体そんなことをして何になるんですか」と。「特に何かになるというものでもないですねぇ」と答えにもならぬ答えをした。突き詰めて考えていけば、文学部での講義は多かれ少なかれ似たところがあるであろう。すぐに目に見えて世の人助けになるとか、金儲けにつながるといったことはなかろう。今や、世の風当たりは強いが、それをこそ誇りに思う人さえいる。無用の用ということも必要ではあろうが、ここではその議論はさしおく。私が専門とする国語学に限って話を進めたい。当時まだ今より国語学という名称は一般的であった。この名称についても、十分考えなければならぬが、ここではその指摘にとどめる。国語学は、実用的に、日本語を教えることや国語教育に携わるのでない限り、研究していること自体が目的であるような面が多かった。当時の学長が（航空宇宙物理の専門家だった）何かの折りにいわれたこと「何か他の学問の役に立つためというようなのは本当の学問ではない」ということを、大型計算機センター教授が皮肉混じりに引用していたのを、一方では、大いに疑問に思いつつ思い出したりもしていた。

人間は、昔から実用を離れて純粋に真理を追究するということをしてきた。一見無用と見えることをしてきた。ただ、無用か無用でないかは遂にわからない。無用に見える行為が見方や立場を変えると、意外な効用があることがある。それを目指すか目指さぬかで結果は大いに違うかも知れない。他のことはよくわからないので、話を私の専門に限る。この中にも、世の中から見れば愚にも付かぬと思われることを真剣に、世のため人のためになると思ってやっている人も、数多くはないがいる。多くはむしろ興味が先で、役に立つ立たぬなど考えもしない。それもさておき、言葉の由来を微にいり細を穿って、ああでもない、こうでもない、とやっていることなど、実用にはならぬ、愚の骨頂だと思う人もいよう。むしろ、表てだってはそんなことはいわなくても、そう思っている方が普通かもしれない。中にはただ面白がってやっている人もいよう。しかし、それが徹底的に無意味かといえば、そうばかりもいえない。当面無用かもしれない。このご

ろは、何でも性急に成果が要求される。出来ることと出来ないこととがある。あまりな性急さは文化の底の浅さを示す以外の何者でもない。言葉の詮索にしても、大した役には立たぬまでも、辞書の記述には利用され、後人の指針となるだろう。言葉を学ぼうとする人にも何らかの貢献をしよう。母語話者なら誰でも知っているような文法規則の記述にしても、それが間違っていなければ、第二言語として習得しようとする人には無上の指針になる。国文法の授業が学生生徒に人気のないことは、一面そんなことは知っているし、わざわざ勉強しても特別利口になるものでも、言葉遣いが上手になるのでもない、ということが、関係していると思える。

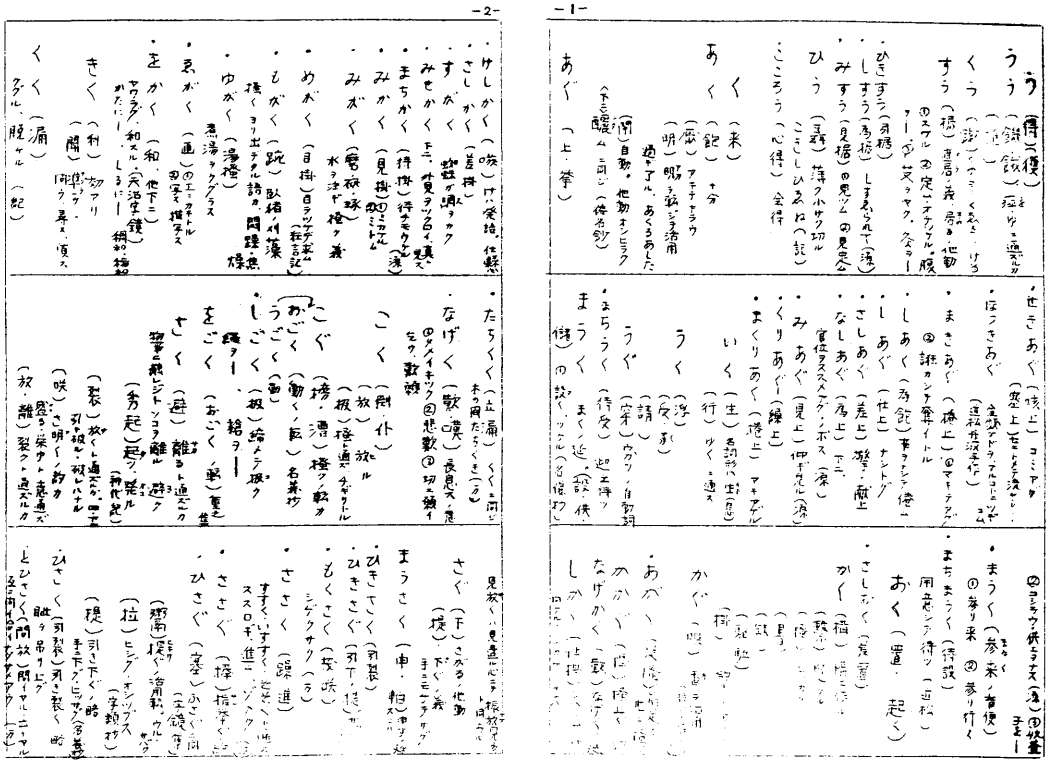
もっとも、そういう文法記述にしても、いつも自覚的に何か特別の目的を持ってやっているとは限らない。自覚的にやれば目的に沿って効率的にやる仕方もあろうが、無自覚的な場合にすら、どこでどう利用されるか分からぬ。無用無意味と決め付けることはなかなかできぬ。要は、有害でさえなければいいのだといってもよいように思う。

20年ほど前になるが、当時同僚であった丹羽一弥氏と話をしているうちに、日本語の逆引き辞典を作ろうということになり、そのときに勤めていた東海学園女子短大の学生諸君を語らい、その全面的な協力を得て、岩波書店の国語辞典と三省堂の明解古語辞典を底本にして、カードを取り、四苦八苦しながら配列し、「日本語尾音索引　現代語篇」「日本語尾音索引　古語篇」を完成した（後に柴田武氏はこれを進呈した礼状に「手作業の最後の仕事になるでしょうね」と書いてくれた)。今でこそ日本語においても「逆引き辞典」と称して一般に通用するが、当時、そんなものが何になるのか、というのが大方の感想だった。

この出版もリスクを犯して笠間書院が引き受けてくれた。後に、宮島達夫氏にこの名称が不適切だという指摘を受けたが（「紹介田島毓堂・丹羽一弥共編『日本語尾音索引一現代語篇一』」『国語学』118　1979)、こんな名前を付けたのは、同書院から出ていた索引叢書の中に入れて出版してもらうための苦肉の命名であった。こういう事情があった。当時は「逆引き」ということばは、Reverse Dictionary の意味では使えなかった。索引などを校正するとき、いちいち当たり直すことを「逆引き」と称していた。

それ以前に、斉藤義七郎氏が「大言海」の形容詞、動詞、名詞をそれぞれ別々に抜き出して逆順に配列したものを作っておられた（孔版印刷で非売品。その存在も知らなかったが、動詞篇は正式名称「日本語の語尾分類によるさかさ引辞典　動詞篇」昭和43年４月８日全77ページ（図版１)、形容詞篇は同５月23日全19ページ、名詞篇は草稿で年月不記332枚である。このことは尾音索引を贈呈したドイツの Günter Wenk 氏から、この業績を紹介しないのはけしからんといってお叱言を頂いて知った。後述の山田忠雄氏の「語末辞書として見た「韻さぐり」」にも書いてあったが、見逃していた。そのことは、「日本語尾音索引　古語篇」のあとがきに記してお詫びした。

純粋な語末辞書としては昭和19年の京大文学部編の「箋注和名類従抄国語索引」の後半の語末索引がある。



（図版１　斉藤義七郎編『日本語の語尾分類によるさかさ引辞典　動詞篇』）

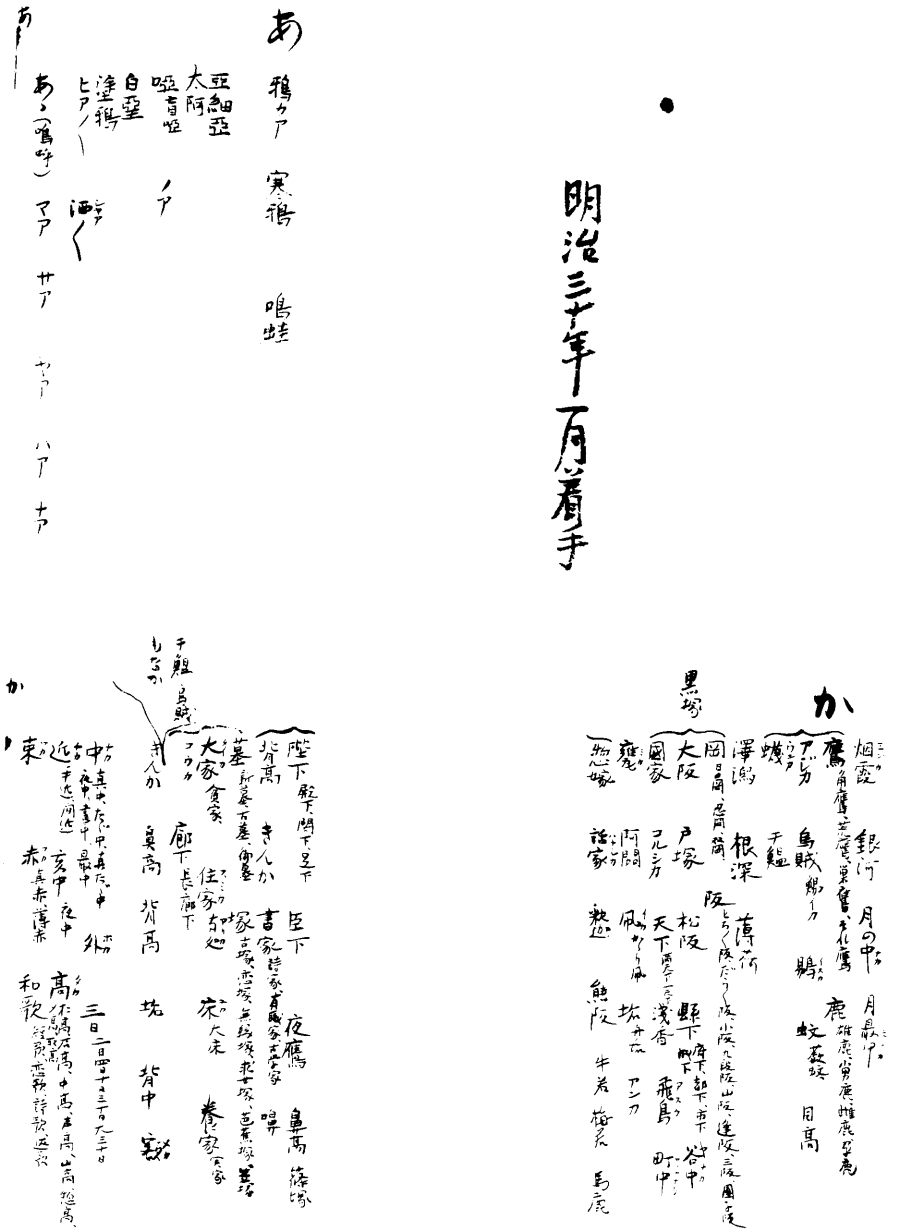
これ以前にさかのぼると、正岡子規の「韻さぐり」というものがある。これは子規の心覚えのようなものであるが、それを複製したものが昭和46年に出ている。土屋文明の序があり、山田忠雄氏の「語末辞書として見た「韻さぐり」」という解説があり世界の逆引き辞典がいくつか紹介されている（図版２）。

さらに遡れば、山田氏が紹介する節用集に語末からの検索を試みるものがあり、連歌書「詞林綱目」（別名「詞林万葉良材」）などが、語の検索の便を図るものとしてあった。そのほか、野田忠粛（1648～1719）に「万葉類礎」「三代集類礎」というものがある。それぞれ万葉集、三代集の歌を末尾にイのつくもの、ロのつくもとというように配列したものである。その一部を図版として掲げておこう（図版３・４）。

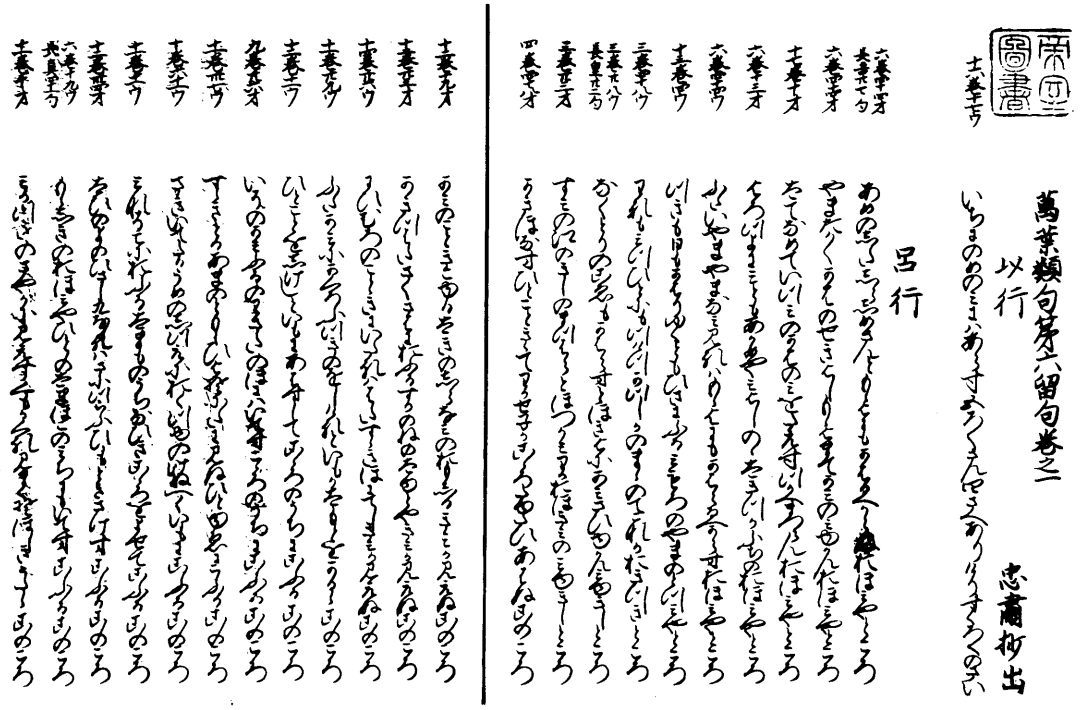
一体これが何のためのものか、節用集や連歌書同様検索の便のためということは見当が付くが、それ以上に語末からの配列ということに特別の意味を見出せない。節用集がイロハ順と意味分類を併用してもなおかつ検索に不便を感じたことは、イロハ順といっても語頭だけに限られることからわかるし、たくさん語がある部分にそれ以外の分類基準があれば便利なことはわかる。しかし、「類礎」は単に語末の音によって配列しただけである。語頭からの配列以上に何をねらったかは十分に説明できない。「歌末語索引」（「万葉八代集歌末語索引」遠藤嘉基監修　洛文社　昭

和54年）というものが作られているのとも違うように思う。現在、万葉集・古今集・後撰集・千載集・新古今集・続後撰集の類礎がある（宮内庁書陵部・高松宮家蔵）。

当然和歌のためのものであろうとは思うが、和歌の修辞法として体言止めとか、音数律の問題は指摘されるが、歌の末尾の音を対象にどうこうと論ずることはないように思う。しかし単に検



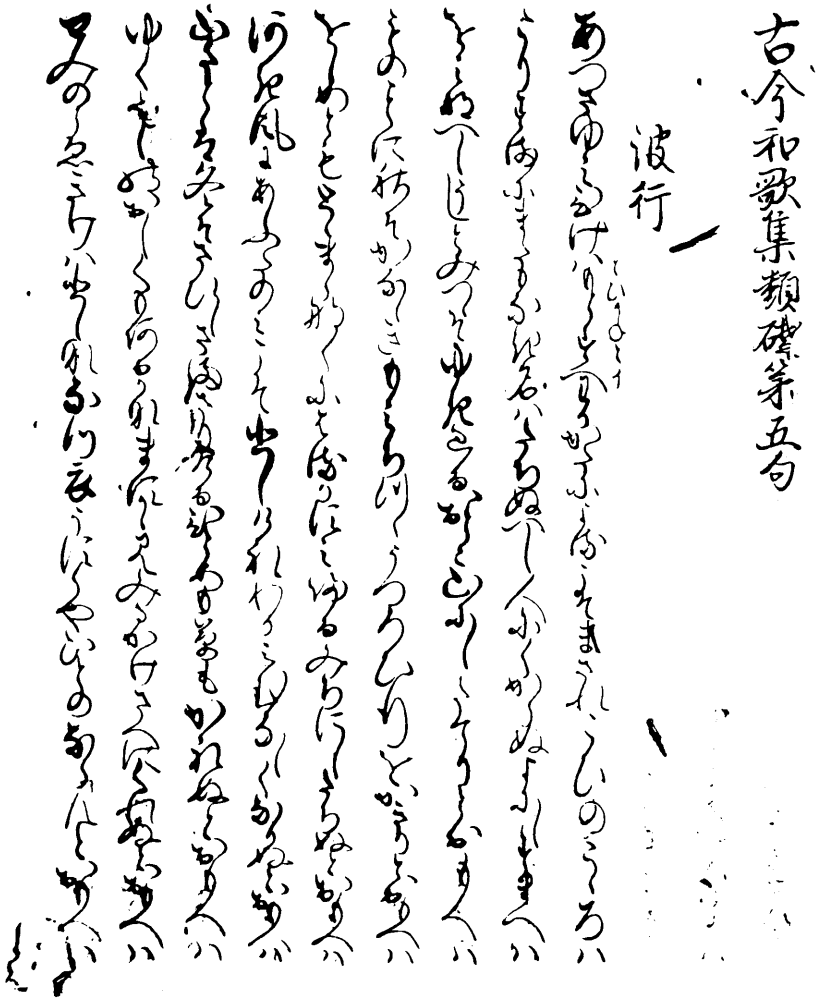
（図版２　韻さぐり）



（図版３　「万葉類礎」宮内庁書陵部蔵）

索の便だけでなく、語末から配列するには何か目的があったように思えるのだが、いかがであろう。今は国歌大観という和歌検索には便利なものがあるが、そのできる以前は「～類句」「～類字」というのが、その役を果たしていた。類礎もそれにならい、しかも「礎」つまり最後の字によって類別したもの、やはり歌の検索ということが最大の目的であったのであろうか。

それに対して、子規の場合は明白な目的があった。作詩上の要求であった。山田忠雄氏の解説には、本書が「明治三十年一月着手」とあることから、「病中の徒然を慰める手遊び」としか書かれていないが、同年三月五日の日付のある、「新体詩押韻の事」という一文には、日本の詩に押韻が困難であるということを人々がいうのを承知しながら、実際に試みてみたら割合簡単にできた旨を報告し、詩の言葉が多少佶屈晦渋になることはやむを得ぬとし、さらにまた、新体詩はあえていえば散文であって詩ではないとさえいう（「子規全集」十七巻189頁～198頁　改造社　昭和五年）。そこで詩に韻を踏むことを考え、中国伝来の、そして日本でも遊びとして試みられた「探韻」にちなんで、命名したのである。明治三十年二月十七日の漱石宛書簡のなかではこれを「韻礎」と称している。この手紙の中では「新体詩に押韻を初めたところが実にむつかしい更に句切の一致をやつて見た処が更にむつかしい、更に難しいほど更に面倒くさい。更に面倒くさいほどに更に面白い、四五日前には毎夜発熱にもかゝはらず二時三時迄夜を更かして一篇を作るに四日程かゝつた頭がわれるやうに苦しいこともあつた目が見えぬ迄に逆上した事もあつた併し



(図版4　「古今集類礎」高松宮家蔵)

出来て見ると下手でも面白い病気なんどはどうでもいゝと思ふ」「死ぬるの生きるのといふはひまな時の事也此韻はむつかしいが何かいゝ韻はあるまいかと手製の韻礎を探つてゐる間に生死も浮世も人間も我もない天下は韻ばかりになつてしまつてゐるアゝ有難い此韻字は妙だと探りあてた時のうれしさ」(『子規全集』九巻611頁　アルス　大正14)とこの押韻のためであることをはっきり述べている。

周知の通り、日本の詩歌には押韻の習慣は、頭韻においても脚韻においてもない。もっとも、詩の作法としてないだけであって、人麻呂の「あしひきのやまどりのをのしだりをの……」などには仄かに脚韻らしきものを感じるのである。ただ、これが意識的なものであったかどうか。

子規が実際にそれを試みたと思われるものは、それぞれに、その表示はないが、明治三十年二

月以後の次のようなものではないかと思われる。

子の愛

桟橋長う海の上、
あわただしげにわめく声、
船今出づと彼方なる、
蒸汽に近く人のよる。

旅路に馴れぬ者は実に、
水夫のあらき言葉、何、
危急を告ぐるしるしかと、
轟く胸に波の音。

……

この詩は、二月二十日の日付があり漱石宛書簡の記事と符合する。四十連にも及ぶ長詩であるが、一連の中の第一行と第二行、第三行と第四行とが、それぞれ共通の末尾一音を持っている。三月五日の「俚歌に擬す」と称するものは、いろいろな形の押韻を試みているが、概して、句末の一音か二音の共通である。一句おきに押韻を試みるものもある（「子規全集」七巻438頁～　改造社　昭和五年)。音数律の他にこういう試みをしているのであり、そのための「語彙」が「韻さぐり」に他ならないと思われる。これが成功しているか否かの判断は控える。その後の近代詩の流れを見ていけば、佶屈晦渋という点は子規のいうとおりのものがあり、押韻を意識的に詩法として用いたのは、蒲原有明がいるが、他には押韻詩が優れたものとして文学史に記されているものはない。

読者はこの子規の詩をどう感じられるであろうか。このことを自覚的に実践している詩人に谷川俊太郎がいる。また、劇作家の井上ひさしもそうだ。前者は「ことばあそび」とはっきり銘打っている。井上ひさしの戯曲の中にはふんだんに脚韻が用いられている。どういう効果があるかは一読明らかである。それぞれ、一例しておこう。

まいまい	このへん
まいまいは	このへんどのへん
まいまうまい	ひゃくまんべん
まいまいの	たちしょんべんは
うまいまい	あきまへん
もうまうまい	
まいまいは	このへんどのへん
めまいのやまい	ミュンヘン

まいまいの　　ぺんぺんぐさも
まいまいみまい　　はえまへん
かかすまい

このへんなにへん
へんなへん
てんでよめへん
わからへん

(『ことばあそびうた　また』1981　福音館より)

そのとき
道元　道元　道元禅師は
どげんしたとな？
そのとき
道元　道元　道元禅師は
こげんして
あげんして
そげんしたとや
道元禅師の　御誕生を
いざやつげん

赤橋　道元どのに　頼みがござる
家来　一所懸命の　頼みがござる
赤橋　坐禅をやめて　くださるまいか
家来　天台兼宗して　くださるまいか
赤橋　いやならいやで　覚悟がござる
家来　それならそれで　覚悟がござる
赤橋　断じて禅宗は　禁止でござる
家来　念仏宗と同じく　禁止でござる

(『道元の冒険』1971　新潮社より)

これより先、漱石の「吾輩は猫である」の中で、次のようにいうのもこの効果をねらっているように思えてならない。「とちめんぼう」の話である。主人に向かって客人、越智東風が、

「夫れから二人で表へ出ると、どうだ君うまく行つたらう、と椽面坊を種に使つた所が面白からうと大得意なんです。敬服の至りですと云つて御別れした様なもゝ実は午飯の時刻が延びたので大変空腹になつて弱りましたよ」

(『漱石全集』第一巻四十九頁　昭和四十年版による)

越智東風もここでは「をちとうふう」と振り仮名があるが、「東風」には「こち」が利かせてあり、漱石は、ここで「敬服の至り」と「大変空腹」を意識的に配していると考えていいように思う。

中日新聞夕刊コラム「夕すずめ」は押韻に満ち満ちている。押韻の効果は十分理解されるであろう。

それゆえにこそ、大まじめな和歌や詩にはまともに脚韻が取り上げられなかったのである。我々の「尾音索引」作成の発端は、言語の本質を明らかにすることに役立てようとすることにあった。特に丹羽氏は言語学科の出身であるだけに、フロズニーの業績が念頭にあった（丹羽一弥「日本

語における語末辞書の試み」『東海学園国語国文』12　1977)。私は以前からの興味、語構成を考える資料にしようとしたのであったが、前記のように、世間では「何で……？」というのが大方の反応だった。しかしできてみると、我々の意図とは無関係に随分いろいろな面で反響があった。文章を書く人々によく使われることを知った。ことに、日本語教育において有効で需要の多いことを知ったのは当初は予想外であった。新聞などでも取り上げてくれた。それをみた、ある人が『日本語逆引き辞典』なるものを作り大出版社から出して、我々のを出してくれた書店を大憤慨させたりしたのはおまけだった。なお、同書は我々の尾音索引普及版のために書いてくれた、谷川俊太郎氏の推薦文をちゃっかり引用している。余談になるが、我々のを出す直前に角川書店の者だという人から電話があり、出版をやめるようにいわれたことがある。特許を犯しているというのであった。いろいろ調べてもらったが、書名について新案特許ということはあるが、五十音の配列に、逆からにしろ特許などということはなかろうと思い、よく話を聞かせてもらおうということで若干の曲折があったが、本筋でもないので、この話はこれにとどめる。

前に書いたことがあるが(「『日本語尾音索引』現代語篇・古語篇―日本語逆配列辞典の試み―」『書誌索引展望』5-2　1981)、逆引きのことを書いてこれを逃すことはできないので、簡単に記しておく。風間力三氏が『綴字逆排列語構成による大言海分類語彙』(1979) という立派な業績を公刊された。これも出発は「綴字逆排列語彙」つまり逆引き辞典を目指したもので、これによって語彙の研究を目指されたものであることは、風間氏のあとがきに明らかである。我々のものより数年前から手がけられたが、結果的に公刊が遅れたことを悔いておられるが、単純に並べ直しただけのものとはちがい、語種別にし、品詞ごとにした手の込んだ作品であって、同列に扱うべきものではないと思う。ただ、そのためにある語を探そうとすれば大変である。私は我々の尾音索引と風間氏の分類語彙との差をいうのに、「メッキ」という語をあげる。風間氏のでこれを探すのは至難の業である。もちろんそんなことを目的としたものではないから、そのことが何もその値打ちに関係のないことはいうまでもない。メッキがどういう語種であるかがわからないとさがせないのである。

それはともかくとして、「何のために」ということはいつも問う必要のあることである。しかし、自分がこれこれのためと思っていることが、世間一般で同じようにとられるとは限らない。しかしまた、何のためかということがはっきりしないとどうしていいかわからぬ事があることは事実である。

語彙研究は何のためになるか

話を語彙研究に戻そう。それが何のためかを自らはっきり自覚すると同時に、その研究の状況の打開をはかるために、多くの人々にその目的を明瞭に示して理解を得る必要のあることを痛切に感じる。これは大学という学問の空間においてすら、世間一般と少しも変わらない。

ここで語彙研究というのは、個々の語の研究をいうのではない。個々の語の研究は昔から誠に

盛んであり、今も盛んである。語彙研究にこれが不要というのではない。これこそ語彙研究の基礎になるものである。語彙研究には総体としての語彙、つまり、語の集合としての文字通りの語彙を研究対象とする部門（＝語彙総体論）と、その要素たる個々の語を対象とする部門（＝語彙元素論）が必要なことは今更いうまでもないかも知れない（「語彙論の課題―集団的規範と個別的実現―」『名古屋大学国語国文学』71　1992)。

ところが、こと語彙研究に限っては、この個々の語の研究ばかりが盛んで、総体としての語彙の研究などは、その歴史はわずか一世紀にも満たない。そのためか、語彙研究といえば、ほとんど「語の研究」を指すかのごとくである。そして、それは「語彙」という用語の誤用につながっている。言語研究者一般はもちろんのこと、語彙の研究者の論文の中にすら「語彙」の怪しい用法がある。あきれるほどである。当の語彙研究の論文中にすら誤用が見られるのには目を覆いたくなる思いである。このことはもう何回も書きもし、事あるごとにうるさく注意を促した。目立った反論がないのは当然のこととして受け止められているとばかりもいえない。依然として、平気で同じ事を繰り返しているのを見れば。まともな意見としては、では「語彙」とか「語彙的」というのにどういったらいいか代案を出せといわれたことくらいである。「語」あるいは「単語」で十分であるし、「単語的」ないし「語として」で大部分十分である。ただ、「単語」が使われにくいことはわからなくもないが、語彙が誤りであるに対して、単語なら問題ないことは、多くの場合に当てはまる（もっとも、周知のごとく単語の定義自体万人の納得を得るものがない。前田富祺氏にならい無定義元素としておく。「語彙の体系について」『東北大学教養部起用』19号1974等)。とにかく、語や単語を無造作に語彙といっていることが多い。言語研究者がいっているのは許し難い。

なにも難しいことはない、語と語彙は違う、語彙の彙はものが集まっていることをいうのであることさえ知っていればよいのである。この自覚があれば誤用のしようもないのである。もっとも、微妙な場合もある。一定の語群を語彙というかいわぬかである。「語彙」が水谷静夫氏のいうように（「語彙論の術語をめぐって」『国語学』62　1965)「類をもって集まる」ものだということをふまえれば、もはや誤用の余地はあるまい。用語に対する自覚が何より必要なゆえんである。世の中に通用しているからしようがないといういいわけはやめよう。いくら通用していても、間違いは間違いである。誤りを改めるにしくはない。

誤用の典型は「語彙的意味」というのをはじめとする「語彙的～」である。lexical の訳語のようであるが、lexicology を語彙論と訳したことに誤りの一つの原因があろう。これも個々の語の研究が先行し、vocabulary の研究がないがしろにされたためにこれを、語彙論と不用意に訳したものであろうか。lexicology は決して study of vocabulary ではない。こういえば明確であろう。study of vocabulary が語彙論である。最近の英和辞典で lexicology が「語義学」とされているのは正しい。

その他にも「語彙」なる用語が誤用される契機はいくつも指摘できるが、根本原因は結局、語

彙を文字通り総体として扱う分野の未開性が最大であろうが、一般の誤用はともかくとしても、少なくとも言語研究者が「用語」である言葉に無神経であることは許されるべきことではなかろう。重ね重ね注意を喚起しておきたい。

随分回り道をしたが、最初の設問にはまだ答えていない。しかし、かなり答えに近づいてきている。

なぜ語彙なる用語が誤用されたか。語彙を文字通りに研究する部門の遅れが決定的であった。それでは、なぜそれがそんなに遅れたのか。それは、この設問にあるように何のためにするかのという、研究の必要性、研究の意義が認識されにくかったということにあったのではなかろうか。もちろん、語彙は厖大な世界であり、つかみ所のない茫漠たるものであるから、研究自体が困難であることは十分考えられる。しかし、それでも、その研究が必要とあらば、研究方法も見出されたであろう。必要はなんといっても発明の母である。逆にいえば、必要性の認識されないところに問題の解決はあり得ない。現に、前世紀末から今世紀はじめにかけて、多くの困難を乗り越えて大規模な語彙調査が実施された（田中章夫『国語語彙論』昭和53　参照)。それは言語教育のための基本語彙を選定しようとする動機と目的が存在したからであった。今でも数十万・数百万の単位の語彙調査は大変であるが、当時の困難さはコンピュータが駆使できる今日からは想像を絶するものがあったであろう（拙稿「語彙研究とコンピュータ」『名古屋大学国語国文学』77　1995)。それでも、それはなされた。必要があったからであった。言語教育のための基本語彙選定や辞書の項目をたてるためといった実用的目的があった。

日本の国立国語研究所における多くの語彙調査ももともとは戦後の言語政策と関係があったが、やがてそのなかから、それとどまらず、言語の計量的研究や語彙調査の結果の語彙表の提示の仕方を単に、使用率だけ、あるいは、五十音順だけということで済ませておくことにあきたらず、シソーラスの考えが芽生え採用され、さらに成長した。それらは今日から見れば比較にならぬ劣悪な条件の下で行われた。すでに昭和三十年代という、早くからコンピュータを導入したとはいえ、その能力たるや、現在から見ればおもちゃに等しく、その操作は多大な労力を要した。考えれば、コンピュータのための実験台であったかも知れない。昭和五十年代のはじめに一千万円近くの巨費を投じて導入された名古屋大学文学部言語学研究室のミニコンピュータが大して利用されることもなく、昨春廃棄の憂き目を見たことはコンピュータの長足の進歩を如実に示すものであった。私自身もこの十数年コンピュータの援助を得ているが、その進歩を身にしみて感じている。コンピュータによってとはいえ、まだ、困難な時代に、語彙を語彙として扱い、単に基本語彙の選定といったことにとどまらず、そのデータ自体を語彙として対象に据えた研究が行われるようになったのである。それ以前のものは、基本語彙の提示で終わってしまったものが多い。

しかし、基本語彙の選定はそれで十分意味のあることであった。ただ、それ以上に進まなかったのはなぜかといえば、やはり、語彙を語彙として対象に据えて研究することの意義が、基本語彙選定のようには明確に認識されなかったことによるのであろう。

今日においてすら、一つの言語の語彙調査から何が得られるかということを考えてみると、多大な労力を費やしてであるが、確かに結果として語のリストはできる。使用率の高いもの、そうでないものを選別できる。差しあたりは、多分低頻度語は無視されるであろう。高頻度語こそ基本的なものであるからであり、それは割合納得しやすい。しかし、そこに提示される語のリストは高頻度語であればあるほど、一部専門家にとってはある種の感慨を催すことはあるではあろうが、多くの人々にとっては日常慣れ親しんだ、いってみれば何の変哲もない面白くもおかしくもない言葉であろう。名詞なら、ヒト・モノ・コトを筆頭に、コレ・ソレ・アレ・ココ・ソコ・ナニ・トコロ・トキなどといったもの、動詞なら、アル・イウ・イク・クル・キク・ミル・スル・ウツ・トルなど、形容詞もナイを筆頭にヨイとかワルイといったもので、ああそうか、なるほどといった程度の感慨以上のものを呼び起こすような、興味のあるものはない。

しかし、これは自分の母語についていうことである。一旦、目を外国語に向ければ俄然持つ意味が違ってくる。日本語に対してならば、外側から見れば、つまり、外国語としてみればにわかに精彩を帯びてくる。母語話者にとっては小学校入学以前に覚えてしまっているような、従って空気のような存在で、意味の説明など不用なものが、多くを占めるであろうが、第二言語として修得しようとするに際しては、最重要な語彙である。そう考えてみれば、この何の変哲もない高頻度語群も輝いて見えてくるのである。別の言い方をすれば、それらこそが、その言語を支えている骨格であり、その言語集団の文化を支えまたその文化に支えられてきたものである。そこにその文化が反映しないはずがない。その点にこそ、言語研究の他の分野、音韻・文法とかなり色合いの異なるものがある。音韻や文法に文化が反映しないというのではない。が、その度合いは全く異なるし、音韻論や文法論では外界との関わりをなるべく排除するような方向で研究が進められたのではないだろうか。純粋に言語内の問題、言語形式の問題としての処理が可能な形で進められることが多かったのではなかろうか。語彙論は決してそうはいかない。言語外の事実との関係こそが第一に問われることであった。

従って、語彙研究は文化の研究と直接関わりを持つ。いや、文化の言語的研究である。こんなことはいってみれば当然な事である。今更何を事新しくとさえいわれるかも知れない。しかし、本当にそう正しく認識され、その認識のもとで語彙研究がなされてきたといえるであろうか。はなはだ心許ない。現に語彙を総体として扱うにも、使用率の問題や品詞別の構成比の問題が取り上げられることが多かった。それが無意味だというのではないが、それだけでは決して語彙は明らかにならない。その中で、語種の問題はすぐれて文化的な問題となりうるが、品詞的構成の問題は簡単には文化の問題にはならない。それが意味を持ってくるのは、やはり、他の言語の語彙と比較対照してみるときである。高頻度語から得た基本的語彙が他言語としてみたとき、あるいは、他言語のそれと比較したとき、大きな意味を持ってくるように、品詞の比較にしても、他言語の語彙と比較したときに重要な意味を持つことになるであろう。同じであればなぜ同じか、違うならどこがどう違い、なぜそれは違うのかと問うことができる。問うことがなければ答えもな

い。問うてもすぐには答えられないかも知れぬが、やがて明らかにされることがあろう。

一方、語種の問題はもともと他言語の要素が関係しているので、文化との関わりは最初からある。

つまり、他言語を視野に入れたとき、あるいは、同じ事だが、他言語としてみたとき、語彙研究ということは俄にその意味を主張してくる。そこに比較語彙論という視点が重要になってくるのである。

日本語学の中でも、たとえば、和文系語彙と漢文訓読系語彙というものが築島裕氏によって区別すべきものとして指摘され(『平安時代語新論』1969)、それによって新たに多くの事実がはっきりしてきた。今や和文系語彙中の語か、訓読系語彙中の語かということを区別することは常識になっている。これも、仮名文学と漢文訓読語という異種のものの語彙を同時に視野に入れて比較してみたことによっての発見であったといえる。比較語彙研究はさらにそれを他言語に比較の対象を求めようとするのである。

そうはいっても、これが容易でないことはいうまでもない。その方法や、対象の選定などについては、すでに諸処で述べたのでここでは繰り返さない(拙稿「比較語彙論の構想—異文化比較研究のために—」『国際開発研究フォーラム』2 1995等)。

以上により、最初の「何のために……」という質問には大方答えたことになろう。繰り返しになるが、寄り道しながらの模索だったので、もう一度まとめておく。

すなわち、語彙研究はその言語集団の文化及びその根底を明らかにするための研究であると。そしてそれは、他と比較することが捷径であり、そういう視点の欠落によって、その研究意義が認識されずにきた。一方、人々の興味と関心をそそった、個々の語については、それが実用的価値を持つことにより、古来盛んに行われてきており、その成果は各種の辞書 lexicon に結実している。それこそが lexicology であり、その研究の結実を対象にしたのが lexicography である。lexicology が語彙論とされてきたのも一方では無理からぬ事であった。しかし、今や違う。

かつて、国語学会での講演会(1996春)において、言語学者千野栄一氏は次のような趣旨の言葉で、講演「一般言語学から見た日本語」を結び、感銘を与えた。

> 言語学は、①言語とその部分との関係、②言語と言語との関係、③言語と言語外事実との関係、この三者の研究がバランスよく進められたときに大きく進展するものである。

と。

周知のごとく、従来の言語研究は①②にかたよっていた。亀井孝、河野六郎両氏とともに同氏がその編者に名前を連ねる『言語学大辞典』(三省堂)の第6巻術語篇1996の中の「語彙論」という項目(517頁)の記述自体に氏の責任は直接はないであろうが、ここにはこの執筆に関わられた方々の語彙論に対する絶望的ともいえる無理解が表明されている。ここでは、「語彙論(ごいろん)英 lexicology 仏 lexicologie 独 Wordschatzlehre」は vocabulary の研究とはされていない。それどころか、

語彙（vocabulary）は言語学の具体的な材料である。したがって、それを研究する語彙論という領域があって然るべきであると思われる。ところが、言語形式を対象とする言語学は、すでに語彙を使って語の音韻をもっぱら扱う音論や、語の文法的形態および機能を扱う文法論（形態論、統語論）を発達させている。また、語の意味を論じる意味論という分野もある。とすると、語彙論という領域がそれ自身として存在しうるのかという疑問が起こってくる。（517頁）

という。「語彙を使って」とか、この記述の後に出てくる「語彙の知識は、言語学の前提条件である」というような「語彙」の用法もあり得るのだろうが、首を傾げたくなる。こういう使い方は世の中には充満している。「語彙」という項目で「現在のところ、言語学のこの部門、すなわち、語彙論（lexicology）は理論的にいまだ十分に解明するに至っていない。語彙の研究は従来、辞書記述者（lexicographer）の手によって実績を上げてきた」（512頁）と、はしなくも lexicology＝語彙論＝lexicography という図式を表明している。その直前の記述では、「語彙」を「語（word）の集まり」とした上で、「言語学ではこれを拡大解釈して1言語のもつ全語彙について用いる。」と正しくいっているのとどうつながるのであろうか。辞書を語彙そのものと考える人は多いようであるが、このことも十分吟味してみる必要のあることである。『言語学大辞典』を細かく検討してはいないが、そこここに怪しげな「語彙」の用法が見られる。語彙研究に対する世の認識、言語学の世界の認識の状態を示しているものと認識してよかろう。

こうした中において、語彙論を正当に主張していく困難はひしひしと感じるが、言語学を発展させるうえでも、重要な意義をもつものであることは、以上によって了解されるであろう。